

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

—教育社会学・ジェンダー・フェミニズム—

中西 祐子*・堀 健志**

1. はじめに

1960年代から70年代にかけて世界同時に発生したウーマン・リブの思想は、女性をめぐる問いのたて方を大きく転換させた。それまで個人的な「欠陥」として認識されてきた、1950年代から60年代にかけてのアメリカの中流の裕福で「幸せな」専業主婦女性の「得体のしれない悩み」⁽¹⁾を、男性中心主義的な社会の問題ととらえ直した女性学に、その転換を見ることができる。日本の教育社会学にもまた、女性学に影響を受けつつ独自に展開してきた一連の研究群がある。

日本教育社会学会大会においては、「婦人教育・社会教育」部会が設置された1977年以降、毎年ではないけれども、頻繁に「女性と教育」もしくは「ジェンダーと教育」部会が設置されてきた。そして、1990年代には「女性」もしくは「ジェンダー」を冠した部会がふたつ設置されたり、こうした部会の外側でも「女性」や「ジェンダー」が論じられるようになってきた。課題研究のテーマとしても、「女性の高学歴化のインパクト」(1979)、「女性と教育」(1980)、「教育とジェンダー」(1989)、「教育とジェンダー(2)」(1990)が設定されている。また、学会員が開催するラウンドテーブルでも、ジェンダーや女性がテーマとしてとり上げられ、多くの参加者を集めた。学会紀要では、1985年には「女性と教育」特集が組まれ、第50集の記念号では「ジェンダーと教育」についてのレビュー論文(森 1992)が掲載された。これまでに掲載された投稿論文も少なくない。教育社会学において、「女性」や「ジェンダー」というタームは市民権を得たどころか、かなりポピュラーなものとなった今日、その研究成果をまとめ

* お茶の水女子大学 ** 東京大学大学院

る時期が来た、と言えそうである。

他方で、「最近のジェンダー研究は元気がない（停滞している）」という声があるという⁽²⁾。考えてみればこれほど痛烈な批評はない。この批評は、「女性／ジェンダーと教育」というテーマが制度化され市民権を得た今日、フェミニストのラディカルな問題意識や意気込みが弱まるという逆説を指摘するものである。あえて言うならば、既存の知識の男性中心性を批判して新たな知識の産出を試みるという意気込みはどこへいったのか、このままで女たちの生活条件を変革できるのか、というラディカルな問いかけである。誰がこの問いかけを無視することができるのだろうか。

この論文は、「ジェンダー論の現在」が置かれた錯綜した文脈を考慮に入れつつ1985年から1995年にかけての「女性／ジェンダーと教育」研究のレビューを試みるものである⁽³⁾。まず2節で、第40集（1985）以降における「ジェンダーと教育」研究の展開を、教育・職業達成と性差という観点からあとづける。そして、3節においては、これまでの研究に共有されてきた枠組みの変化をあとづけ、それらがはらむ問題点を指摘する。そして、この指摘を受けて4節では、「ジェンダーと教育」研究の〈これから〉を模索する。最後に、「ジェンダーと教育」研究の文献リストを掲載した。「ジェンダーと教育」研究⁽⁴⁾の文献リストの作成にあたり、学会紀要の巻末に掲載されている「教育社会学文献目録」の「ジェンダー」の項目に入れられたもののなかから、大学および研究所紀要や学会誌に掲載された論文および著作を網羅的に採録した。ただし、1985年から1990年までは「ジェンダー」の項目が存在していなかったため、1990年の前後で選択基準に相違がないよう、性差／性役割／性差別をテーマとしているものをリストに収めた。

ところで、読者がこの論文に意見の対立を感じることもあろうかと思う。それはもちろん、この論文を執筆した二人が異なる志向性を持っているからにはほかならない。しかし、ここで顕在化させる対立は、筆者らの「頑なさ」に由来するものでは決してない。むしろ、この対立を顕在化させることを契機として、「ジェンダーと教育」研究の〈これから〉をめぐる議論を活性化させることを望んだ結果なのである。筆者らは個々の先行研究の意義と問題点について幾度となく議論を繰り返すことを通して、先行研究という共有財産を、まさに共有するという過程を経験してきたと思う。この過程は、お互いの立場の同一性と差異を理解する営為であったろう。こうした営みをこの論文に反映させることこそ、「ジェンダー論の現在」が置かれた錯綜した状況をふまえたレビュー論文にふさわしいと筆者らは考えたのである。「ジェンダーと教育」研究とは、さまざまな声によって編まれた織物のようなものであり、この織物はまた教育

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

社会学という織物を編み込む声でもある。したがって、対立する声が鳴り響こうとも、それは「ジェンダーの教育社会学」の〈これから〉を考える上で、生産的であり可能性を秘めたものとなろう。

なお、1節と3節を堀が、2節と4節を中西が執筆分担した。

2. 「ジェンダーと教育」研究、これまでの展開

本節では、第40集「女性と教育」特集号（1985）以降、教育社会学会員の手により行われてきた「ジェンダーと教育」研究の動向を振り返る。なお紙面の都合上、以下では教育社会学が伝統的に研究を行ってきた学校教育あるいは学歴とジェンダーとの関係を中心にレビューすることにした。作業にあたっては、学会誌・学術書掲載論文をもとにおおまかな研究動向をつかみ、大学・研究所紀要論文、調査報告書を用いてその流れを補充した。従って紹介できる論文は学会員のごく一部の業績にすぎないことをあらかじめお断りしておく。なお、リスト掲載外の参考文献については各項ごとに注釈をつけた。

第40集以降の研究動向を“ジェンダー”と教育研究の観点から振り返るならば、日本教育社会学におけるジェンダーと教育研究の出発点は、教育達成や職業達成の性差を後天的に「つくりだす」フェミニン・ソシアリゼーション（中山 1985）への着目にあったと言えるだろう。以後、ジェンダーと教育研究は、女子の教育達成、職業達成をめぐる議論をメインストリームとして展開してきたといっても過言ではない。

(1) 「閉ざされた」職業達成⁽⁵⁾

まずは、教育社会学における古典テーマとも言える、職業達成と教育・学歴についての知見からふりかえることにしよう。この数十年間、女性の学歴上昇は目覚ましい様相を見せている。一般に高学歴化は職業選択機会の拡大をもたらすと言われるが、実際にはどうであったのか。

女性の職業達成が男性に比べて「閉ざされた階層空間」に限られたものであることを指摘したのは今田（1990）である。「閉ざされた」範囲内にせよ、学歴が職業継続状況に与える影響についてはライフコースレベルを対象とした研究が行われてきた（今田 1985, 岩井 1990, 真鍋 1996）。ただしその知見は必ずしも一定ではない。今田（1985）は学歴が結婚時の職業継続率や育児終了後の再就職率にプラスの効果を持つことを指摘し、その効果を肯定する。一方、真鍋（1996）は高学歴女性の職業継続が一樣ではないこと、学歴効果が就業中断後に消失することを指摘し、学歴効果を全面

的には肯定しない。さらに女子学生の就職活動を研究した吉原（1995）によると、高学歴者であっても、女子は入職以前より男子とは異なる処遇を受けるといふ。就職活動を通じて女子学生が体験することは業績（職業）達成と自らの性（ジェンダー）との不整合であるといふのである。

以上をふまえると、高学歴化が即職業達成に結びつくといふことはできない。なお、就職活動や職業経歴のみならず昇進構造などにも学歴とジェンダーが錯綜した効果がみられるだろうが、絶対数が少ないためかこのテーマは未開拓のままである。唯一、伝統的に女性に道が開かれてきた教員研究では女性管理職の少なさが指摘されている。その理由は教員自身の意欲（田中 1991・1994）と教員の職業的社会化（蓮尾 1993・1994）の両側面から検討されている。加えて管理職の選抜基準自体に「一見性別とは関係ないものの、結果として女性に不利になり、女性を排除する定義・基準・方法」すなわち「システム内在的差別」がみられることも指摘されている（河上 1990）。

なお、極めて職業威信の高い職に就いた「エリート女性」を研究した加野（1988）、河野（1995）、冠野（1996）によると、そこでも男女で地位の大きな格差があること（加野）、男性にはみられない非業績主義的な輩出ルートを経由した女性が少なからず存在すること（河野・冠野）が明らかになっている。

(2) 「教育達成」の内実——女子高等教育の拡大と「女性専用軌道」⁽⁶⁾

高度経済成長期以降、女子の高等教育進学率は男子のそれを追うように上昇し、今日では男子のそれを越える勢いにある。しかしながら既に見てきたように、女性の高学歴化は依然職業達成に結びつくものではない。その理由の一つとして女子高等教育の拡大を質的側面から見直した研究も展開されてきた。天野編（1986）および日本女子大学編（1987）では、女子高等教育の量的拡大の実体が短大や女子大、家政・人文系など特定の「女性専用軌道」に集中したものにすぎない（天野編 1986）ことが明らかにされている。

そもそも女子高等教育に対する社会的ニーズが、職業達成を目的とする男子のそれとは大きく異なるという指摘もある。中山（1985）によると女性の教育アスピレーションは、職業アスピレーションよりも結婚アスピレーションとの結びつきが強く考えられるといふ。また天野（1987a）は戦前期の女子高等教育が特定の階層の男性の妻に相応しい身分を示すための「地位表示的機能」を果たしていたことを示したが、同様の機能の存在は現代の日本社会（中西 1994）や韓国社会（金 1993）についても

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

指摘されている。

今日までの女子高等教育研究は、女子学生が集中する機関を中心に各論的展開を見ている。亀田（1986）、濱名（1987）、池木（1991）による女子短大研究、河上（1986）による女子大研究などである。また平野（1986）、亀田（1995）はアメリカ女子高等教育、矢野（1986）は女子高等教育の経済効果、吉田（1985）、宮島他（1993）は女子学生の出身階層の研究を行っている。また女子学生の意識調査は牧野・上野（1986）、渡辺（1988）、菊地他（1992）、中西他（1994）、村松（1994）、加藤他（1995）が、高学歴女性のライフコース分析は青井（1988）が行ってきた。一方、理工学、医学、法学、経済学など女性の少ない分野に進んだ女性を対象とした研究や大学時代の社会化過程の分析は意外にも少ない。これらは「なぜ、『女性専用軌道』ができてしまうのか」を明らかにするために今後不可欠な研究対象であろう。

(3) 平等幻想と学校教育——ブラック・ボックスへの着目⁽⁷⁾

それではなぜ、女性の多くは「女性専用軌道」へと導かれていくのだろうか。天野（1986・1988）はその原因として大学進学以前の社会化過程に見る必要性を説いた。それまでブラックボックスとされてきた中等教育以下の学校内部過程に光をあてた諸研究は、他の社会機関に比べて平等幻想の強い学校内部にもまた根深いセクシズムが潜んでいることを明らかにしてきた。

ブラックボックス内では何が起きているのか。高校生活が、男子と女子の間に質的に異なる地位の予期的配分と社会化をもたらす過程であることは既に石戸（1992）によって指摘されている。森（1985）はその「過程」をとらえるための解釈的アプローチの有効性を示唆した。そもそも学校は、平等主義（業績達成）とセクシズム（性役割の社会化）という矛盾したメッセージが錯綜する場である（木村 1990、氏原 1996）。学校は、特定のジェンダーのありようを価値づけ、その価値づけを学校内外を通じて公然と正当化する機関といえるのである。その様相は、サブカルチャーや（宮崎 1993a）や学校文化の学校間格差（トラッキング）（中西 1993）にも現われることが指摘されている。

一方、教室の秩序統制のための教師のストラテジーが性役割の社会化へと帰結することも明らかにされている（森 1989・1995、宮崎 1991）。教師はあえてそれを使用する必要性がない場面においても、性別カテゴリーを多様しているのである。確かにそれは、単なる指導上の「区分」であるが、園児・生徒にとってはまぎれもないリアリティとして立ち現われる「かくれたカリキュラム」となる。もっとも、教師のスト

ラテージとして性別カテゴリーが多用される原因には、ほとんどの学級が男女比を意識して形成されているという事実もあると思われる。従って、今後は、園児・生徒にとってのリアリティ構成とその社会化効果だけでなく、学級が他の基準（たとえば奇数月生れ／偶数月生れなど）を無視する一方で男女比には意識的な構成をとっているという「不自然さ」を問い直していく必要があるだろう。

なお、秩序統制の結果ジェンダー・アイデンティティが取り込まれる過程を問題視するだけではセクシズムとの関連が曖昧になりやすいことを指摘する声もある（河出 1993）。河出はミクロな相互行為場面におけるカテゴリー間の力関係と意味の解釈過程に着目し、女兒が男児に「力を奪われた」状況にあること、園児が持ち込む性別カテゴリーやステレオタイプについての知識が、相互行為を通じて強化される過程の抽出を試みている。

(4) 近年の動向——feminine socialization から doing gender / 近代批判へ⁽⁸⁾

女性の業績達成を阻むものは何か。フェミニン・ソシアリゼーションの過程にその原因を見出した一連のジェンダーと教育研究は、労働市場、高等教育、初等・中等教育における性役割の社会化過程の探索を続け、今日に至っている。しかしながら、個人はエージェントが発するメッセージを一方的に受容するだけの存在でないこともまた確かである。一方的な社会化—内面化図式を否定し、個人の側の選択過程に着目した研究にも触れておかなければならない。

神田他（1990）は性役割との葛藤に直面した際、危機回避のため女性が「折り合い行動」をとることを指摘する。同様のことは学校の要求する「女らしさ」に対して、それを自分たちなりの方法で適応／反抗を繰り返す女子生徒についてもいえるであろう（宮崎 1993a）。また抑圧的に捉えられがちな女性役割に対する解釈も、個人の側ではさまざまであるという（越智他 1993）。さらに、個人の内面化する性役割が、さまざまなイベントを契機に「揺れ」や「変容」を繰り返すことも女性、男性双方について明らかにされている（井上・亀田他 1994, 多賀 1996）。しかしながら「主体的」な適応／反抗は、社会変動の芽を産み出すものであると同時に、結果的に再生産へと導かれるものである場合も少なくない。今後は変動と再生産の可能性をめぐる議論も望まれるところである。

最後に、性役割の社会化—内面化の図式そのものを否定する欧米のポスト構造主義のインパクトを紹介しておこう。これはセックス、ジェンダーといった概念をア・プリオリに設定すること自体否定し、ジェンダーは他者との差異化行為を通じて初めて

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

産出されるものとみなす立場である。既に理論の整理は藤原（1995）によって始められているが、今後は経験的研究の蓄積が待たれる。なお、先に取り上げた森（1989・1995）や宮崎（1991）の研究をポスト構造主義的に読み替えると、そこで観察された過程は、ある集団と他の集団との差異化行為を通じて「ジェンダー」という「知」が産み出される過程そのものを捉えたものということもできる⁹⁾。すなわち「ジェンダー」は初めから存在しているのではなく、学校における性別カテゴリー使用というジェンダー顕在化行為（doing gender）を通じて初めてその場に出現するのである。

なお、これとは全く独立の流れとして業績達成の〈基準〉を問い直す一種の近代批判もみられる（宮島 1989, 木村 1989a, 吉原 1991, 天野 1995c）。おそらく今後のジェンダーと教育研究には、女子の教育達成、職業達成とその阻害要因をめぐる議論という従来のメインストリームが暗黙の前提としてきたことへの問い直し作業を新たに加える必要があるだろう¹⁰⁾。次節では、これまでのジェンダーと教育研究が展開してきた言説そのものを「問い直す」作業を行ってみたいと思う。

3. 「女性／ジェンダーと教育」研究の言説史試論

—教育社会学とフェミニズムの狭間で—

本節は、知識の〈政治性〉¹¹⁾に注目して、「女性／ジェンダーと教育」研究の展開を批評する試みである。〈女〉という「他者」を産出し排除する男性中心的な支配的知識と、それによって支えられる社会組織・社会過程を批判的に捉え直すために、そして、〈女の声〉を教育社会学や日常世界に挿入していくために、これまでの研究群が産出してきた知識の性質を問うことは必要である。これはまた教育社会学において「女性／ジェンダー」を論じることの意味を再考することでもある。用いる資料は主に、神田道子ほかの『『女性と教育研究』の動向』（『教育社会学研究』第40集, 1985）、天野正子の『『性と教育』研究の現代的課題』（『社会学評論』No. 155, 1988）および課題研究での発表『『ジェンダーと教育』研究の動向と課題』（1989）、森繁男の『『ジェンダーと教育』研究の推移と現況』（『教育社会学研究』第50集, 1992）である。「ジェンダーと教育」の枠組みをめぐる対立がこれまで顕在化せず、これらがしばしば参照されたことをふまえると、それぞれの論文は、各著者の個人的な立場にとどまらず、各時期の枠組みを代表し規制したものと捉えられる。以下、それぞれのレビュー論文を発表された順に批評してゆく。

(1) 〈女〉と〈女の経験・声〉——可視化と周縁化のダイナミクス

神田道子他(1985)による網羅的なレビューは、〈女〉を可視化しているかどうかを一義的な基準として「女性と教育」研究を同定した。その上で次のような区別をする。一方は、〈女〉の〈経験〉を「客観的」に、したがって所与のものとして描き出す流れである。もう一方は、「圧倒的に女性研究者が多く」「研究者自身の生活と結びついた分野、職業や高等教育研究」が多いという神田の指摘からも分かるように、研究者自らが直面してきた、男性のそれとは異なる〈経験〉を、〈女として〉納得のいくやり方で、〈女の経験〉として描き出す、いわば〈女の声〉を表象する流れである。後者は、セクシズムを問い直すという意味で「問題創出的」かつ「解釈的」な研究であり、教育社会学の中に〈女〉という対抗的な研究主体を打ち立てる言説的な実践であった。セクシズムをめぐる、これら二つの流れは対立する。セクシズムを問題視しない前者の流れは「教育社会学」に、それを批判する後者の流れは「フェミニズム」に、それぞれ連続性を見いだすことができる。しかし、神田が「現状では両者の流れにもとづく研究の関連性が不明確であり、それぞれの成果の位置づけはむずかしい」と述べるように、この時点で両者が明確に区別されていたわけではない。

いずれの流れであろうとも、〈女〉を可視化したことの意味は非常に大きい。教育社会学が〈女〉を排除することによって知識の体系を構築してきたことを潜在的にであれ、暴露するものであったからである。言い換えれば、〈女〉についての知識を単に補足するのではなく知識を置き換える試みであった。しかし、この潜在的な、あるいは顕在的な〈政治性〉のゆえに、〈女〉を可視化する研究、なかでも〈女の経験・声〉を表象する研究は教育社会学において周縁化された、と筆者は仮説的に考えている。この周縁化の問題はしばしば言及される研究主体の存在被拘束性の問題ではあるが、更に言えば、教育社会学に内在する正統的知識の基準、知識をめぐる〈政治〉の問題である。もし、〈女の経験・声〉を表象する研究が周縁化されてしまうとしたら、どうすればいいのだろうか。研究共同体や日常生活世界で、それはいかに周縁化されるか、それを周縁化することが「合理性」を持つ〈社会〉はどのようにつくられ、どのように維持されるのか——この問いに答える必要があろう。

(2) 「平等主義」の罫——「ジェンダー研究」の隆盛、そして体制内化

天野正子のレビュー(1988)は、森繁男(1992)が振り返っているように、以降の文脈を決定づけるものであった。「平等主義」と呼ぶにふさわしい、この論文が提示する枠組みは、学校組織、教師、教科書・メディア、仲間集団、家族といった社会化の

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

エージェントによる性別役割規範の内面化の結果として、つまり社会的に構成されたもの（ジェンダー）として、教育達成の性差を説明するというものである。良妻賢母主義や「特性」教育論など、あからさまなセクシズムが見えにくくなった今日、問題とすべきは、業績主義＝平等なはずの学校に潜み、性別役割規範の内面化をもたらす「かくれたカリキュラム」だということ。そして、教育達成の性差をうみだす「学校の内部過程」を、いわゆる「解釈的アプローチ」によって開示する必要を論じる¹²⁾。

さて、この枠組みは、第一に、性別差異を社会的／生物学的という観点から分節化することによって、「女性」を「ジェンダー」へと衣替えさせ、第二に、「教育と不平等」という教育社会学の主要テーマに接続させた——どれほどその重要性を強調しても強調しすぎということはないだろう。90年代の教育社会学における「ジェンダー研究」の「隆盛」は、この枠組みを抜きに語れない。しかし、教育社会学の文脈における「女性」から「ジェンダー」への転換は、認識対象のセクシズムを矮小化することとなった。教育達成の性差こそが、解消すべき一義的な「問題」となったのである。

「平等主義」は、ジェンダーとは無関係で中立的な、つまり〈真の〉業績主義＝平等＝自由な主体＝〈到達目標〉を産出し、その実現を妨げるものをセクシズムの発動と見なす。しかし、「能力」が「男性性」を基準にして構成されたものであるならば¹³⁾、業績主義とは、非属性主義の名において、「女性性」や〈女の経験・声〉を組織的に抑圧し、その抑圧を正当化するイデオロギー装置であろう。また、性別役割規範から自由な個人とは、この文脈でいえば、「男性性」によって定義され、それゆえ「女性性」を抑圧した、業績主義イデオロギーが要請する主体である。「平等主義」がジェンダーと無関連で中立的なものとして産出する業績主義や自由な個人とは、実は、〈到達目標〉である〈男〉を基準としたイデオロギー的な構成物である。

このため「平等主義」は教育達成に直接関連しないように見える現象——例えば、学校教育のなかの日常的なセクシュアル・ハラスメント、十代の少女の妊娠をめぐる処遇、〈女の経験〉に気づき、語ることの困難さなど——を周縁化するのみならず、それらを問題化させない社会組織・実践・知識を、結果として補強してしまう。筆者はここに問題設定と産出される知識の男性中心性を見る。〈女の経験・声〉を周縁化する「平等主義」の男性中心主義的な言説に筆者は賛成できない¹⁴⁾。ウーマン・リブ以降のフェミニズムは、男並みか、さもなくば妻・母あるいは「仕事と家庭の二重負担」かという選択しかありえない社会を撃ったのではなかったか¹⁵⁾。〈女〉や〈女の経験・声〉の周縁化によって構築される、男性中心主義的な近代の社会組織・実践・知識が獲得してしまう「合理性」を、ジェンダーと無関係で中立的な領域を想定する「平等主義」

の枠組みによって問題化することができるだろうか。

(3) 〈女たち〉——新たな研究領域の「発見」か？

「平等主義」は〈女たち〉からの批判にもさらされる。それは、「平等主義」が〈女の経験・声〉を矮小化するのみならず、結果として（研究者の意図はどうあれ）一部の女性の経験や利害を「女性全体」のものとして権威づけし一般化することにより、異なる経験や利害を表象する声を周縁化するからである。例えば、「男女の不平等」を発見する手続きを単純化するなら、〈階層や学業成績を統制し、教育・職業達成の性差を見出す〉ということになるだろうか。この問いのたて方が、階層や学業成績に基づく「不平等」を正当化する言説となることは明らかである。

「平等主義」に内在するこの問題を乗り越えようとしたのであろう、天野¹¹⁶は学会発表において「今後の課題」として『女性間』格差の生成過程の研究を期待した。しかし、「平等主義」の問題はこれだけではない。たとえ、階層や学業成績を統制せずそれらに基づく「不平等」を正当化せずとも、「平等主義」が教育・職業達成の性差を問題化するとき、それが誰にとっての問題か、誰の経験や利害に基づく問題かという問いを不問に付し、〈到達目標〉を教条的に一般化していることは明らかであろう。そうであればこそ木村（1990）は、「〔先行研究の〕セクシズムをとらえる視点が一部の女性の問題意識に偏ったものになりがち」であると明言し、「階級」とジェンダーをクロスさせた分析の必要性を主張したのである。少なくとも木村や天野は、「平等主義」が不可避的にはらむ〈政治性〉を、しかもセクシズム批判の文脈において、問い直したのである。「女の利害」を表象してきたフェミニズムが、その中産階級・白人・異性愛・西欧中心主義ゆえに〈女たち〉に批判された経緯と同型的である¹¹⁷。〈女たち〉の間で利害が対立してしまうセクシズム社会をいかに考えてゆくか、〈女〉とは誰のことか、〈女の経験〉〈女として〉とは何を表象しているのか——木村や天野が提示した問いである。しかし、これ以降、具体的な資料にもとづいて女性内部の差異を論じる研究の多くは、セクシズム批判という文脈において女性間の利害の対立を扱うものではなく¹¹⁸、新たな領域の「発見」=「セクシズム批判の陳腐化」=ジェンダー研究の「成熟」として現象したようである。

(4) “ポストモダンの” な枠組みへの転換——そして、研究の「非政治化」？

森繁男（1992）は、教育社会学における「女性／ジェンダーと教育」研究の展開をあとづけて、筆者のいう「平等主義」の教育分析から、セクシズムを内在する「近代

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

教育』の成立基盤」の分析へ、さらには日常的な知識・実践における「性的カテゴリー生成とその運用過程」の分析へと展開したと論じる。これらの枠組みの関連性を森は明示していないが、この展開の含意を筆者なりに述べれば、セクシズムを〈近代学校に付随する前近代の残滓〉と捉える「平等主義」から、セクシズムによって構造化され、セクシズムに自明性を付与しつつ、〈いまここ〉においてセクシズムを産出する教育の近代性を開示することを志向する「ポストモダン」へと転換したといえるかもしれない。

しかし、こうした「ポストモダンの」な見解にもかかわらず、森は「ジェンダーと教育」研究を非政治化するようにも見える。日常世界の秩序の被構築性の分析（森のいう「性的カテゴリー生成とその運用過程」の分析）と、権力関係の分析との関連が判然としないのである。森は「男女の不平等な達成」だけではなく、「自然に見えるジェンダー関係」を論じることにより、「『ジェンダー関係』の総体はそのような『葛藤と融合』の様々な組み合わせの中においてこそ把握し得る」という。そして、例として、消費社会・情報化社会において「記号としてのジェンダー」を個人が「選択」「演出」することや、「『ジェンダー』は単に『達成』を競い合う社会的カテゴリーではなく、日常的にはむしろ『親和関係』として現象しているし、そのための『演出』さえ企てられる」「『セクシュアリティ』の様態」を挙げている。ここで構築された二項対立——「男女の不平等な達成」としての「葛藤」／「演出」によって「自然に見えるジェンダー関係」としての「融合」——は、「平等主義」と同じように、ジェンダーの正義 gender justice の要求を「達成」の男並み化に回収させ、権力関係についての問いを周縁化してしまうであろう。なぜなら、ジェンダーをめぐる「葛藤」あるいは「闘争」は、親和関係や演出、すなわち「融合」と表象されるものにこそ見いだされるものだからである。もちろん、「親和関係」が「演出」される「『セクシュアリティ』の様態」——秩序の被構築性——を描き出すことは必要であろう。しかし、さしあたりこの文脈において、筆者はそれを〈神話 *mystique*〉と捉えたい——ミレットがセクシュアリティに「家父長制」をみていたように⁽¹⁹⁾。「親和関係」として表象されるセクシュアリティ、セクシュアリティをめぐる親和関係という〈神話〉こそ、女性を籠絡＝主体化させる、セクシズムの言説であると筆者は考える。

たしかに、〈いかに主観性（や間主観性）が秩序づけられているのか〉という秩序の被構築性についての解釈的・実証的な問いは必要であろう。しかし、もし、「ジェンダーと教育」研究がフェミニズムと手を取り合うことを望むなら、加えて、〈その秩序は個人をしていかなる主体の位置をとらせ、いかなる利害を構築し支えるか〉〈その秩

序はいかなる言説を排除もしくは周縁化することによって成り立っているか」という権力関係についての解釈的—政治的な問いが必要であろう。「演出」や「選択」による〈自然に見える親和関係〉という秩序の構築過程は、つねにすでに、ジェンダーをめぐる〈政治的闘争〉の過程である。もし、偶発的な文脈に応じて言説と実践に具現する権力関係の分析を伴わないならば、森の支持する「秩序問題」としてのジェンダーの分析はフェミニズムと方向を違えてしまうように思われる。

(5) 残された問い——「ジェンダーの教育社会学」にむけて

以上の概観から次の問いが導き出されよう。なぜ、どのように〈女の経験・声〉は周縁化されるのか／いかにして〈女の経験・声〉を〈社会〉に挿入していくことができるのか／ジェンダーと無関連で中立的な領域を想定することは可能か／セクシズムは前近代の残滓かそれとも近代の産物か／〈女〉〈女の経験・声〉〈女として〉とはいったい何を表象するのか／秩序を権力と切り離して考えられるのか／そもそもジェンダーとは何を意味するタームか、何を可能にするタームか。この問いに回答することによって、いかなるジェンダーの教育社会学を構想できるのか——ここでは問いを提出するにとどめ、問いへの筆者の回答は稿を改めて論じることにはしたい。

4. ジェンダーと教育研究のゆくえ

—平等主義アプローチとポスト構造主義の「対話」—

本稿では立場の異なる2人の執筆者が、各々の立場からジェンダーと教育研究のレビューを行ってきた。著者は2節で、これまでのジェンダーと教育研究のメインストリームを職業／教育達成とその阻害要因をめぐるものととらえ、レビューを行った。しかし、著者を含む既存の研究者は、その研究枠組自体を、3節において痛烈に批判されることとなったのである。両者の見解が一致したかについては依然はっきりとしていない。なぜなら我々は、相手の立場と接触するたびに自己の研究者アイデンティティの「揺れ」を感じてきたからである。

おそらく我々の「悩み」は、ジェンダーと教育研究に携わるかなりの者がぶつかっている問題ではないだろうか。それは、一体今までの研究は何であり、これからどこへ向かうべきなのかという問いである。そこで本節では、執筆者どうしの論争を通じて筆者が何を学び、現時点で何を考えているのかを率直に記すことで、ジェンダーと教育研究の未来を考察することに代えたいと思う。

前節の主張は、昨今の新しい知の潮流であるポスト構造主義のインパクトと無縁で

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

はなかろう。しかしながらそれらの批判は、立場は異なるにせよ、最近のジェンダーと教育研究に向けられてきた疑問と相通じるものがある。ジェンダー研究の現状について、筆者はこれまでさまざまな疑問を耳にしてきた。同じテーマを対象を変えて追っているだけではないか、いったい＜女＞は＜男＞に到達することができるのか、異なる価値観を持つ＜女＞にとってはリアリティに欠ける、フェミニズムはどこへ行った。そこに共通する問いは「ジェンダー研究に未来はあるのか」ということであつた。

正直なところ筆者にとって、これまでのジェンダー研究の枠組みだけで、これら全てに回答することは難しかった。対してポスト構造主義フェミニズム²⁰の斬新さは、テーマの閉塞観を打破すること、近代のカラクリを問うこと、＜女＞の非統一性を語ること、フェミニズムとの距離を埋めることすべてが可能となる点にある。それでは、ジェンダー研究の未来はポスト構造主義フェミニズムに託すべきなのだろうか。

既存のジェンダー研究者にとってポスト構造主義フェミニズムを取り込む作業はそれほど容易ではない。なぜならそれは、主体としての＜女＞を予め設定することすら否定し、ジェンダー研究の偉大な発明品ともいえる社会的文化的性差「ジェンダー」の概念さえ「肉体的差異に特別の意味を付与する『知』を産出する＜本質的＞なもの」として退けるからである。それなら、現実に我々が目にするさまざまなセクシズムを「問題」視することはできないのか。それらの告発を＜本質主義＞と片付けてしまうことはセクシズムの隠蔽に加担することにならないのか。これはポスト構造主義フェミニズムに対して誰もが一度は思う疑問ではないだろうか。

しかしながら、ここにはある種の「誤解」がある。なぜならポスト構造主義フェミニズムは反セクシズム色にかけては既存のジェンダー研究以上のラディカルさをはらんだものであるし、その実体は巷で錯覚されているような現実から切り離された「理論」や「哲学」ではないからである。例えば平等主義アプローチのように、文脈を越えた「とりあえずの理想状態」を設定しない点がポスト構造主義フェミニズムの分かり難さや足場の弱さともいえるが、これらの「誤解」をときその有効性を示すためには、ポスト構造主義者の手による経験的研究の提示が今後不可欠とされる。

では、ジェンダー研究の未来はポスト構造主義フェミニズムによってのみ開かれるのか。逆説的であるがこの答えは「否」というしかない。なぜなら、ポスト構造主義フェミニズムだけで全てのジェンダー研究の課題を提示することはできないからである。例えば現実の制度、規範、慣習において「女であること／男であること」に基づいた差別や制約、処遇の違いや不当な権力行使があることを問題視するためには、モ

ダンなレベルでの課題設定も依然有効と言える。一例として大卒女性の就職差別をとりあげるならば、たとえそれが限界あるものであるにせよ、とりあえず提示される平等主義（なぜ「女」であることが制約条件になるのか）は、基準の問い直しや業績主義批判と同時に重要といえるだろう。もちろん「大卒女性の雇用条件よりもっと悲惨なパート女性の就労条件を無視している」という疑問も当然出てこようが、ここで取り上げた大卒女性の雇用条件をもってして、あらゆる女性の雇用条件を代表させようとしているのではないことを断っておきたい。全ての問題を一度に語ることのできる課題設定など、そもそも存在しえないのであり、研究者は場面場面での問題を一つ一つ課題としていくしかないからである。確かに、これまでの研究がエリート女性を対象とした「達成」や「平等」物語に傾斜していたという批判は免れない。が「達成」や「平等」を問題にすることは、例えばパート女性の保障制度やノン・エリート女性の教育条件などを課題とする時には依然不可欠であり、それこそ今後の平等主義アプローチが発掘すべき研究課題ともいえる。すなわち、平等主義アプローチ一つを取り上げてみても、モダンパラダイムの中での課題はまだ尽きていないのである。

おそらく、既存のジェンダー研究とポスト構造主義フェミニズムのどちらがジェンダー研究の未来を担うべきかという議論は意味がないであろう。むしろ研究者に必要とされるのは、戦略に応じて既存の研究視角とポスト構造主義的視角の双方を使い分けることではなかろうか。

なお、日本教育社会学会という文脈において展開されるジェンダー研究に対するポスト構造主義のインパクトとしては、近代批判や文脈ごとに異なる〈女〉への着目のみならず「セクシズムを問題にする視点」をあげることができよう。そもそもポスト構造主義とは「どんな言説／知識も自身の政治的立場から免れることができない」という視点から既存の科学批判を展開するものである。このことは、フェミニズムと距離をとることによって「科学化」を図ろうとする傾向にあった、筆者を含めた最近のジェンダー研究者が真摯に受け止めなければならない忠告ではないだろうか。

異なる世界観に立つ既存のジェンダー研究とポスト構造主義は、今後も激しい対立を続けることが推測できる。しかしながらこの対立は、むしろ併存してこそ意味があるのではないかと筆者は考える。なぜなら、ジェンダー研究にとって、どちらも決して完璧な存在ではないと同時にどちらも不可欠な存在だからである。陳腐な言葉ではあるが、お互いを批判しあう立場の共存は、極めて健全な状態ともいえるのではないだろうか。

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

【付記】 本稿執筆にあたっては、多くの方々から貴重なご意見をいただいた。とりわけ、執筆計画から草稿に至るまで長期にわたるご指導を頂いた耳塚寛明氏（お茶の水女子大学）、ジェンダーと教育研究の動向と課題について執筆者と議論くださった神田道子氏（東洋大学）、折りに触れ筆者たちの論争に参加頂いた桑田直子氏（お茶の水女子大学大学院）には特筆して御礼申し上げる。

〈注〉

- (1) Betty Friedan (1963=1965) 三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房
- (2) こうしたコメントがラウンド・テーブル「ジェンダー（研究）を問い直す—ジェンダーの現在性—」（1996, 世話人：望月重信・森繁男・近藤弘）でなされたという。『日本教育社会学会会報』No. 112（1997年5月）。
- (3) なお、『教育社会学研究』掲載論文に限っては第60集（1997）までを対象とした。
- (4) 「ジェンダー」という概念が持つ多様な意味を考えると、それらを腑分けして扱うべきであろうが、さしあたり、教育社会学の文脈において「ジェンダー研究」とみなされてきた研究群をリストに収めた。「ジェンダー」概念の多義性については次の論文を参照のこと。江原由美子（1995）「ジェンダーと社会理論」、井上ほか編『ジェンダーの社会学』岩波書店。
- (5) 参考文献：今田幸子（1990）「地位達成過程」岡本・直井編『現代日本の階層構造』④東京大学出版会、岩井八郎（1990）「女性のライフコースと学歴」菊池編『現代日本の階層構造』③東京大学出版会、真鍋倫子（1997）「女性の職業達成と教育達成」『教育社会学研究』第60集、田中義章（1991）「管理職（校長）志向に関する男女教員格差」日大文理学部社会学研究室『社会学論叢』112号、田中義章（1994）「現代女教師の職業意識に関する覚書」『山形県立米沢女子短期大学紀要』第29号、蓮尾直美（1993）「女性教員のキャリア形成に関する調査研究(1)」『三重大大学教育実践研究指導センター紀要』第13号、蓮尾直美（1994）「小・中学校女性教員のキャリア形成に関する事例研究」『三重大大学教育学部研究紀要』第45巻、河野銀子（1995）「エリート女性の輩出ルートに関する考察」『教育社会学研究』第56集、冠野文（1996）「女性エリート輩出にみる戦後改革のインパクト」『教育社会学研究』第58集。
- (6) 参考文献：金美蘭（1994）「韓国における女子高等教育の拡大と文化」『東京大学教育学部紀要』第33巻、濱名篤（1987）「変容迫られる女子短大」『IDE』No. 288、亀田温子（1995）「アメリカの高等教育にみるフェミニゼーションの進行」広島大学大学教育研究センター『大学論集』第24集、矢野真和（1986）「女子高等教育の社会・経

済的效果」天野編『女子高等教育の座標』垣内出版、吉田文(1985)「東大女子学生の生活と意識」『IDE』No.259、菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞・吉原恵子(1993)『女子学生文化に見るジェンダーの現代的位相』、中西祐子・岩村美智恵・長嶋亜紀子・耳塚寛明(1994)「現代『女子大学』生の行動と意識」お茶の水女子大学心理教育研究会『人間発達研究』第19号、村松幹子(1994)「女子学生のライフコース観の形成」関東社会学会『年報社会学論集』第7号、加藤隆雄・吉原恵子・新谷由里子・金美蘭・中西祐子(1995)『女子高等教育の意味と機能に関する研究』。

- (7) 参考文献：石戸教嗣(1992)「男女差から見た『かくれたカリキュラム』」京都大学教育学部教育社会学研究室『「学習風土」と「かくれたカリキュラム」に関する教育社会学的研究』、氏原陽子(1996)「中学校における男女平等と性差別の錯綜」『教育社会学研究』第58集。
- (8) 参考文献：多賀太(1996)「青年期の男性性形成に関する一考察」『教育社会学研究』第58集、藤原直子(1995)「人間形成におけるジェンダーの諸相」『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第42巻第2号、宮島喬(1989)「文化的再生産論からのアプローチ」『日本教育社会学会第41回大会発表要旨集録』。
- (9) たとえば森(1995)では性の自己認知が不十分な園児が、教師の性別カテゴリーを用いた指導からしばしば逸脱し、矯正が加えられる場面が報告されているが、その過程はジェンダーという「知」が園児に「書き込まれる」過程といえるだろう。
- (10) 教育社会学におけるジェンダー研究としては次も参照のこと。家族とジェンダー [牧野カッコ(1989)「母親の就労化と家族関係」『教育社会学研究』第44集、山村賢明(1993)「母の文化と日本のジェンダー問題」福武書店『子ども学』Vol. 2 など]、メディアとジェンダー [木村(1992・1993)、諸橋(1993) など]、文化とジェンダー [宮島喬・田中佑子(1984)「女子高校生の進学希望と家族的諸条件」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』第5号、片岡栄美(1991)「社会階層と文化的再生産」数理社会学会編『理論と方法』Vol. 7-1、橋本・室伏(1991)、宮島他(1993) など]、階層・教育とジェンダー [菊地城司編(1990)『現代日本の階層構造』③東京大学出版会、岡本英雄・直井道子編(1990)『現代日本の階層構造』④東京大学出版会]、無職女性の地位 [原純輔・肥和野佳子(1990)「性別役割意識と主婦の地位評価」岡本・直井編前掲書、千葉聡子(1995)『女性の地位測定のための尺度作成、及び地位形成と学習の関係についての研究』]、女性学と生涯学習 [亀田温子(1988)「婦人教育の課題解決と『女性学』」全日本社会教育連合会『社会教育』No.504、神田道子(1990)「女性問題学習と女性学プログラム」国土社『月刊社会教育』No.40など]、男性学

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

[諸橋泰樹(1991)「男性学への契機(11)～(20)」ウイ書房『新しい家庭科 We』1～12月など], 歴史社会学 [濱名篤(1991)「篠山高等女学校の成立」天野編『学歴主義の社会史』有信堂高文社, 天野(1995) など] 等である。一方, 性教育やセクシュアリティ研究はわずか [河上(1991), 鐘ヶ江(1994)] であり, ゲイ・スタディーズの類は全くない。今後の研究が待たれるところである。

- (11) あらゆる知識 (=記述と説明) は, 対象・視点・視角・目的の選択的採用をとおして, 一定の〈立場〉を構成する。一方で, 知識は, 特定の利害を表象し, 特定の権力関係の支えとなる言説のなかで産出され, 他方, この言説は研究者が権力関係のなかで占める主体の位置を決定する。この意味で, あらゆる知識は〈政治的〉であり, 研究者は権力関係から自由な空間には存在しえない。
- (12) この「学校の内部過程」と「解釈的アプローチ」というセットは, 1980年代半ば頃からの教育社会学・学校社会学研究の動向と軌を一にしたものである。有り体にいえば, 「男女の不平等が生成される, あらゆる現場・原因を探し出せ」という命題である。このミクロな解釈過程への注目は, 「ノン・セクシスト」を自認する教師さえも, 日常的な実践によってセクシズムを作動させてしまうという理解を与えた。いかにセクシズムが根深く, いかに個人がそこから逃れることが困難であるのかが明らかにされたといえる。しかし, ミクロ過程に注目することの利点は, セクシズムの発動を追認することではなく, ヘゲモニー解体的な言説や実践が生成される現場とその条件——抵抗の可能性——を開示することが可能な点にあると思う。そうであるならば, 論点は〈いかなる視角を現場に持ち込むか〉にあるだろう。ただし, 支配的な言説=セクシズムが現行のシステムにおいて「合理性」「自然性」を獲得していることを考慮するならば, 子どもにとって「非現実的」なアンチ・セクシズム的な知識/言説が, やすやすと受容されるとは限らない [藤田英典(1992)「教育における性差とジェンダー」『性差と文化』東京大学出版会; Bronwyn Davies (1989), “The Discursive Production of the Male/Female Dualism in School Settings”, *Oxford Review of Education*, 15-3. など]。
- (13) 宮島喬(1989) 前掲発表要旨集録
- (14) もちろん文脈に応じて「平等」レトリックが有効性を持つこともあろう。
- (15) 上野千鶴子(1996)「国民国家とジェンダー」『現代思想』10月号
- (16) 天野正子(1989)「『ジェンダーと教育』研究の動向と課題」『日本教育社会学会第41回大会要旨収録』
- (17) たとえば, 『女性学年報』No. 15 (1994) の「マリノリティとフェミニズム」特集

や, bell hooks (1984=1997)『ブラック・フェミニストの主張』勁草書房; Patricia Hill Collins (1991=1993)「黒人フェミニズム：労働, 家族そして黒人女性の抑圧」『日米女性ジャーナル』No. 14; Adrienne Rich (1980=1989)「強制的異性愛とレズビアン存在」『血, パン, 詩』晶文社; Judith Butler (1990=1994-5)「セックス/ジェンダー/欲望の主体」『思想』No. 846-7; Chandra Talpade Mohanty (1988=1993)「フェミニズム研究と植民地主義言説：西洋の目」『日米女性ジャーナル』No. 15などを参照。

- (18) 例外は, 宮崎(1993a)による女子校のエスノグラフィーである。宮崎は, 学校内のグループ間の対立を, 異なる「女らしさ」をめぐる対立を軸に捉え, かつその対立が異性愛というヘゲモニックな読解格子を再一創出してしまふことを捉えている。とはいえ, すでに指摘されているように, 宮崎は「女子高生の出身階層がサブカルチャーのダイナミックスといかに関わっているかには触れていない」[松井真知子(1995)「アイデンティティ形成の舞台としての学校」『女性学年報』No. 16]。
- (19) 例えば, Kate Millet (1970=1985)『性の政治学』ドメス出版。むろん, ラディカル(文化主義)フェミニズムの生物学的決定論もしくは本質主義は相対化されねばならないだろう [Chris Weedon (1997) *Feminist practice and post-structuralist theory*, Blackwell, 2nd. Ed. Linda Alcoff (1988), "Cultural feminism vs poststructuralism", *Signs* 13(3)]。しかし, その前に, 彼女たちによるパラダイム転換の意義を十分に受けとめたい。
- (20) ポスト構造主義とは, そもそもフーコーやデリダらの展開した思想を総称するものであるが, ここでは便宜上, それらポスト構造主義者の影響を受けたフェミニストであるバトラーやスコットらの理論をポスト構造主義フェミニズムと呼ぶことにする。[Judith Butler (1990=1994-5) 前掲論文, Joan W. Scott (1988=1992) 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社] なお, 「フェミニストポスト構造主義」と呼ばれる場合もある。[西舩容子(1997)『ジェンダー形成の学校社会学的研究——ポスト構造主義的展開——』(お茶の水女子大学大学院平成8年度修士論文)]

〈ジェンダーと教育研究文献リスト (1985-1995)〉

青井和夫 1988,『高学歴女性のライフコース—津田塾大学出身者の世代間比較』勁草書房

天野正子 1984,「女たちの性と生」女性学研究会編『講座女性学』第1巻「女のイメージ」勁草書房

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

- 天野正子 1985, 「新制大学と女性」『大学研究ノート』No. 63, 広島大学大学教育研究センター
- 天野正子編 1986, 『女子高等教育の座標』垣内出版
- 天野正子 1987a, 「婚姻における女性の学歴と社会階層」『教育社会学研究』第42集
- 天野正子 1987b, 『自立神話を超えて一女たちの性と生一』有信堂
- 天野正子 1988, 「『ジェンダーと教育』研究の現代的課題—かくされた領域の存続—」『社会学評論』第39巻第3号
- 天野正子・桜井厚 1992, 『“モノと女”の戦後史—身体性・家庭性・社会性を軸に—』有信堂
- 天野正子 1993, 「深層の新性別役割分業」金平輝子編『男女協働社会の創造』ぎょうせい
- 天野正子 1994, 「オルタナティブの地平へ」井上輝子他編『日本のフェミニズム④—権力と労働—』岩波書店
- 天野正子 1995a, 「“ジェンダーと政治”の未来図」(岩波講座・現代社会学) 井上俊他編『ジェンダーの社会学』岩波書店
- 天野正子 1995b, 「“解放”された女性たち—ジェンダーの五五年体制へ—」(岩波講座) 中村政則他編『戦後日本占領と戦後改革』第3巻「戦後思想と社会意識」岩波書店
- 天野正子 1995c, 「問われる性役割—自己決定権の確立に向けて—」(岩波講座) 鹿野政直他編『日本通史』第21巻・現代2, 岩波書店
- 天野正子・長洲一二・縫田曄子 1987, 『男女共同社会を考える』ぎょうせい
- 天野正子ほか編 1989, 『女性ニューワーク論』有斐閣
- 池木清 1988, 『女性と教育』ぎょうせい
- 池木清 1991, 『女性の教育と職業』北樹出版
- 池木清 1994, 『いま女性が主役を演じるとき』英友社
- 池木清 1995, 「女性のこれまでとこれから」『女子教育研究』第16号, 日本橋女学館短期大学
- 池田秀男 1988, 「婦人教育・学習に関する研究の動向と成果」日本社会教育学会編『現代社会教育の創造』東洋館出版社
- 井上輝女・亀田温子・波田あい子・平川和子 1995, 「青春期女子のジェンダー・アイデンティティと自己形成」女性学研究会編『女性学研究』第3号「女性と異文化」勁草書房

- 今田幸子 1985,「女性の職業経歴と教育達成—ライフ・ヒストリー・アプローチから—」『教育社会学研究』第40集
- 氏原陽子 1994a,「隠れたカリキュラムにおけるジェンダー」『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第40集第1号
- 氏原陽子 1994b,「『母性』の概念—『良妻賢母』研究とフェミニズムの対話—」『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第40集第2号
- 越智康詞・菊地栄治・加藤隆雄・吉原恵子 1993,「女子学生文化の現代的位相—女性内分化と女性性の両義性の視点から—」『東京大学教育学部紀要』第32巻
- 小野能文 1988,「現代の女子短大生の結婚観について〔序説〕」『夙川学院短期大学研究紀要』第13号
- 鐘ヶ江晴彦・広瀬裕子 1994,『セクシュアル・ハラスメントはなぜ問題か』明石書店
- 加野芳正 1988,『アカデミック・ウーマン—女性学者の社会学』東信堂
- 亀田温子 1986,「女子短期大学—教育とセクシズム—」天野正子編『女子高等教育の座標』垣内出版
- 亀田温子 1990a,「教育と女性学研究の動向と課題」女性学研究会編『女性学研究』第1号「ジェンダーと性差別」勁草書房
- 亀田温子 1990b,「女性学と教育・学習」志熊敦子編『女性の生涯学習』全日本社会教育連合会
- 亀田温子・舘かおる 1986,「学校におけるセクシズムと女性学教育」女性学研究会編『高座女性学』第4巻「女の目で見ると」勁草書房
- 河上婦志子 1984,「女性と教育」近藤大生・有本章編『現代社会と教育』
- 河上婦志子 1986,「女子大学—存続の方向を探る—」天野正子編『女子高等教育の座標』垣内出版
- 河上婦志子 1989,「女性教員のためのアファーマティブ・アクション」『神奈川大学心理・教育研究論集』第7号
- 河上婦志子 1990,「システム内的差別と女性教員」女性学研究会編『女性学研究』第1号「ジェンダーと性差別」勁草書房
- 河上婦志子 1991,「性教育とジェンダー(1)」『神奈川大学心理・教育研究論集』第9号
- 河上婦志子 1994,「中年期女性のフェミニズム」『神奈川大学<人文学研究所報>』27号
- 河出三枝子 1993,「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論—保育現場における

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

- ジェンダー・プラクシス」『岡崎女子短期大学研究紀要』第26号
- 菅俊夫・土肥伊都子 1995,「日米大学生のジェンダーに関する比較研究」『研究論集』第61号, 関西外国語大学
- 神田道子・亀田温子・浅見伸子・天野正子・西村由美子・山村直子・木村敬子・野口真代 1985,「女性と教育研究の動向」『教育社会学研究』第40集
- 神田道子・平野貴子・木村敬子・清原慶子 1990,「性役割の変動過程を説明する『折り合い行動』概念」女性学研究会編『女性学研究』第1号「ジェンダーと性差別」勁草書房
- 神田道子・木村敬子・野口真代編著 1992,『新・現代女性の意識と生活』日本放送出版協会
- 木村敬子 1984,「女性の性役割意識」女性学研究会編『講座女性学』第2巻「女たちのいま」勁草書房
- 木村涼子 1989a,「女性にとっての『立身出世主義』に関する一考察—大衆婦人雑誌『主婦之友』(1917-1940)にみる」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』第7号
- 木村涼子 1989b,「婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容」『教育学研究』第56巻4号
- 木村涼子 1990,「ジェンダーと学校文化」長尾彰夫・池田寛編『学校文化—深層へのパースペクティブ』東信堂
- 木村涼子 1992,「女性の性役割受容をめぐって」『大阪大学人間科学部紀要』第18巻
- 木村涼子 1993,「少女から女へ—ジェンダーをめぐる大衆文化状況—」M. アップル・長尾彰夫・池田寛編『学校文化への挑戦』東信堂
- 清原慶子 1985,「現代の女性と教育」岩内亮一・仲康・武藤孝典・本吉修二編『教育と社会』学文社
- 坂本辰郎 1990,「教育のエクセレンスとジェンダーの問題」現代アメリカ教育研究会『特色を求めるアメリカ教育の挑戦』教育開発研究所
- 佐藤慶幸・天野正子・那須寿編 1995,『女性たちの生活者運動』マルジュ社
- 多賀太 1995,「男性性の形成に関する考察—性役割分業観との関連で—」『九州教育学会研究紀要』第22巻
- 塚田守 1993,「アメリカにおけるフェミニズム運動の展開」『椋山女学園大学研究論集』24
- 中西祐子 1993,「ジェンダー・トラッカー性役割観に基づく進路分化メカニズムに

- 関する考察一」『教育社会学研究』第53集
- 中西祐子 1994,「女子高校生のライフコース選択—学校要因と家庭要因の比較検討—」,『お茶の水女子大学女性文化研究センター年報』第7号
- 中山慶子 1985,「女性の職業アスピレーション—その背景,構成要素,ライフコースとの関連—」『教育社会学研究』第40集
- 日本女子大学女子教育研究所編 1987,『女子の高等教育』ぎょうせい
- 野口真代・木村敬子 1984,「学校教育と女性観」女性学研究会編『講座女性学』第1巻「女のイメージ」勁草書房
- 橋本健二・室伏宏美 1991,「文化としての『女』と『男』」宮島喬・藤田英典編『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』有信堂高文社
- 肥和野佳子 1986,「大学付属校と女性の人間形成—A 女子大学学園を事例として—」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』6号
- 平野貴子 1986,「アメリカ女子高等教育の動向—1970年代以降を中心に—」天野正子編『女子高等教育の座標』垣内出版
- 牧野カツコ 1995,「教育における性差別」柏木恵子・高橋恵子編『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房
- 牧野暢男 1989,「現代青年の性役割意識」『日本女子大学紀要(文学部)』38
- 牧野暢男・上野真理子 1986,「女子大生の就業意識の構造」『大学論集』16集, 広島大学大学教育研究センター
- 宮島喬・杉原名穂子・喜多加実代・吉原恵子 1993,「文化としての『ジェンダー』とその維持のメカニズム—大学生調査の分析から—」『お茶の水女子大学女性文化研究センター年報』第6号
- 宮崎あゆみ 1991,「学校における『性役割の社会化』再考—教師による性別カテゴリー使用を手がかりとして—」『教育社会学研究』第48集
- 宮崎あゆみ 1993a,「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィーをもとに—」『教育社会学研究』第52集
- 宮崎あゆみ 1993b,「女子高におけるジェンダー・サブカルチャー—女性性への適応と反抗の過程—」『東京大学教育学部紀要』第32集
- 森繁男 1985,「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』第31号
- 森繁男 1989,「性役割の学習としつけ行為」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社

「ジェンダーと教育」研究の動向と課題

- 森繁男 1992, 「『ジェンダーと教育』研究の推移と現況」『教育社会学研究』第50集
- 森繁男 1995, 「幼児教育とジェンダー構成」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社
- 諸橋泰樹 1991, 「女性とマスメディア」西村絢子編『女性学セミナー』東京教科書出版
- 諸橋泰樹 1993, 『雑誌文化の中の女性学』明石出版
- 諸橋泰樹 1994, 「女性雑誌にみる“痩せ”ブームをさぐる」松井豊編『ファンとブームの社会心理学』サイエンス社
- 諸橋泰樹 1995, 「女性学的視座から見たメディア規制とメディアへの異議申立て」『尚美学園短期大学研究紀要』9
- 諸橋泰樹・田中和子 1994, 「新聞紙面にあらわれたジェンダー（その2）—性差別表現をめぐる1991年の紙面分析を中心に—」『国学院法学』32巻3号
- 山口眞 1987, 「英国女性の高等教育へのアクセスとその系譜」日本女子大学女子教育研究所編『女子の高等教育』ぎょうせい
- 山口眞・山手茂編 1987, 『女性学概論』亜紀書房
- 山下智恵子・加野芳正 1985, 「大学生の進路選択—性別役割とのかかわりにおいて」『香川大学教育学部研究報告第Ⅱ部』第35巻第2号
- 吉原恵子 1992, 「『平等』概念と差異化のメカニズム—「ジェンダーの視点」がもたらしたもの—」『放送教育開発センター研究紀要』第6号
- 吉原恵子 1995, 「女子大学生における職業選択のメカニズム—女性内分化の要因としての女性性—」『教育社会学研究』第57集
- 渡辺秀樹 1988, 「学生の性役割観と結婚観」『電気通信大学紀要』1巻1号

ABSTRACT

**Recent and Future Studies on “Gender and Education”:
Between Sociology of Education and Feminism**

NAKANISHI, Yuko

(Ochanomizu University)

2-1-1, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo

HORI, Takeshi

(Graduate School, The University of Tokyo)

7-5-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

Studies on gender and education have become popular in the sociology of education in Japan recently. The purpose of this paper is to review the research from 1985 to 1995, and consider further studies on these issues.

First, we provide an overview of the findings of the studies on gender and education during the 10 years to 1995. Studies on gender and education have been made mainly from the angle of educational and occupational attainment and female socialization. Research on the labor market, higher education, and secondary and primary education socializing processes and gender differences has been produced so far.

Secondly, we analyze the discourse of the studies on gender and education. From the feminist of view, researches in this area so far could neither criticize the androcentrism of the sociology of education nor consider the voices of ‘women’ completely.

Finally, we search for further researches from now on. Recently, new approaches (post-structural feminism) have been introduced in this area. Although we must not forget the importance of former approaches on gender and education, we should learn from the post-structural feminism how greatly we have ignored feminism so far. Since both approaches are needed and neither are complete, future studies on gender and education are expected to be made both using former approaches, and new approaches.